

## go get 構文についての一考察：形態統語論からのアプローチ

山 田 昌 史

A Short Note on the *go get* construction : From an Morphosyntactic approach.

Masashi YAMADA

2016年11月18日受理

### 抄 録

本稿は、英語の口語表現にみられる *go get* 構文について、これまで観察されてきた事実に、Corpus of Contemporary American English (= COCA) からの検索例を加えて、この構文に特異的に見られる *bare-stem condition* (cf. Carden & Pesetsky (1977)) について確認した。そして、この構文の理論的な説明を試みる Bjorkman (2010) を批判的に検討して、形態統語論の立場から新たな分析を提示した。具体的には、既に複合している複合語の外側には新たな形態素を複合できないとする Myers(1984) の一般化を援用することで、複合動詞の外側に新たな形態素が付与できないと分析することで、この構文が動詞の原形しか生じることができないことを理論的に説明した。

キーワード：go get 構文 英語の複合動詞 bare-stem condition  
形態合成 形態統語論

### はじめに

本稿は、(1) のように、動詞を2つ連結することで形成される構文（これを Pullum (1990) は *go get* 構文と呼ぶ）についてこれまで指摘されてきた事実（cf. Carden & Pesetsky (1977)、Pullum (1990)、Bjorkman (2010) など）を中心に、整理する。そして、先行研究（Bjorkman(2010)）を批判的に検討し、形態統語論の観点から分析を提示する。

- (1) a. Come fly with me.  
b. Come see about me.  
c. Go tell it on the mountain.  
d. Go stick your head in a pig. (Pullum (1990): 218)

(1) のような動詞を連結して複合動詞を形成する例は、口語的な英語によく見られるが、組み合わせられる動詞に特徴が見られること、時制や性の一致を受け付けず、常に原形で生じることなど、特に動詞の形態的特徴に特異性がみられる。本稿では、この構文が、なぜ、このような特異な形態的特徴を持つのか、形態統語論の立場から分析を提示することを目的とする。

本稿の構成は以下である。まず、1 節において先行研究から go get 構文の持つ特異な形態的特徴について観察して、先行研究を概観する。2 節では、Bjorkman (2010) のこの構文に関する理論的提案を紹介し、その問題点を指摘する。その上で、形態統語論の観点から分析の可能性を提示し、本稿をまとめる。

### 1. go get 構文の形態的特徴

本節では、go get 構文の形態的特徴を先行研究の例からまとめ、また、Corpus of American English (以下、COCA と略す) の検索例から先行研究の観察が正しいことを示す。

Carden & Pesetsky (1977) (以下、C&P (1977) と略す) は、go get 構文に課せられる動詞の形態的条件として、bare-stem condition (裸語幹条件) を提案している。この構文は(1)のように、動詞が形態的に変化せず、語幹を用いる命令文で生じるものが典型的な例であるが、他の統語的環境にも生じることができる。

- (2) a. John managed to go visit Harry last week. (infinitive)  
 b. John will go visit Harry tomorrow. (Modals) (C&P (1977): 83)

(2a) は不定詞節内に生じる例、(2b) は法助動詞を伴った例であるが、どちらの統語環境においても、動詞は形態的な変化をしない。一方、動詞が形態的な変化を必要とする過去形、完了形、進行形としては生じることができない。

- (3) a. \*John went visit Harry yesterday. (Past)  
 b. \*John has gone visited Harry yesterday. (Perfect)  
 c. \*John is going visiting Harry yesterday. (Progressive) (C&P (1977): 83)

また、主語との一致の観点からこの構文を観察すると、(4) のように主語が 1 人称で、時制が現在であれば容認されるが、主語が 3 人称単数となり動詞の形態変化を強いられる (5) のような文は容認されない。

- (4) a. Every day I go get the paper.  
 b. Every day I come get the paper.  
 (5) a. \*Every day my son goes get the paper.  
 b. \*Every day my son comes get the paper. (Pullum (1990): 219)

しかし、(5) のような 3 人称単数を主語にもつ文に、go get 構文が生じないとはいえない。以下のように、疑問文や否定文で助動詞 do が生じ、それが主語との一致を示すような統語環境に生じると容認される。

- (6) a. Does John go visit Harry on weekends?  
b. John doesn't go visit Harry every day, does he?  
c. Did John come live with you?  
d. John didn't come live with us. (C&P (1977): 83-84)

その一方で、形態変化を生じる場合には、疑問文や否定文であっても容認されない。以下は、完了時制の例だが、疑問文や否定文になっても、動詞は過去分詞であり、原形と形が異なる。このような場合は容認されない。

- (7) a. \*Has John gone visit Harry already?  
b. \*John hasn't come live with us. (C&P (1977): 83)

興味深いことに、(8) のような動詞の過去分詞が生じる統語環境において、動詞の形態が原形と過去分詞が同一の場合、多くの話者が容認可能だとされる。

- (8) a. Tess has come hit the piñata three times.  
b. Jacob has come shut the door.  
c. Helen has come put the vase on the stand. (Bjorkman (2010): 17)

このような複合動詞の例を COCA を使って検索すると興味深い例が見られる。まず、go get 構文が、gonna や gotta の後にも原形で生じる例がみられる。

- (9) a. And I'm like, oh, God, I'm gonna go get some milk.  
b. I also had a set idea that I'm gonna go get her back.  
c. I gotta go see if I can find her. (COCA の検索例)

さらに、使役構文の中に生じているものもみられる。

- (10) a. They made me go see him every week.  
b. If he's not better, have him go see the doctor again. (COCA の検索例)

つまり、go get 構文にみられる bare-stem condition は COCA の検索例からも観察でき、妥当なものだといえる。さらに、COCA の検索例の中には、興味深いもの

がみられる。以下の例は、過去の事態を表すためにひとつの目の動詞の過去形を主動詞として置き、その後不定詞の形で go get 構文を生じさせる例である。

- (11) a. I went to go see “On Your Feet, right, that’s the name?”  
 b. I went to go see “An American in Paris.” (COCA の検索例)

この例は、あくまでも go get 構文は原形での標示が義務的で、過去時制を動詞の形態変化によって表すことを受け付けないことを意味していると思われる。

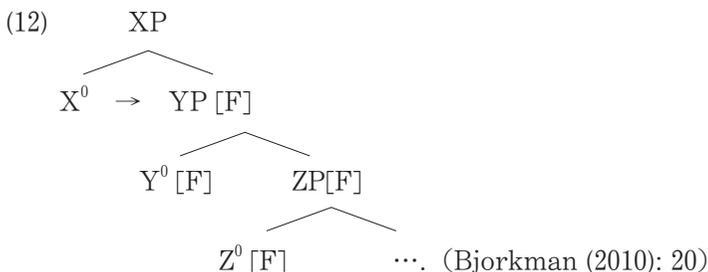
ここまで見てきた例から、go get 構文に生じる動詞は原形であるとする bare-stem condition (C&P (1977)) は妥当なものであるといえる。ここで問題となるのは、英語では動詞が複合する場合、なぜ原形で生じて一切の形態的变化を受けないのかということである。このことについて理論的な説明を試みる Bjorkman (2010) を次節で批判的に検討して、本稿の分析を提示する。

## 2. 分析

前節までに go get 構文の基本的な特徴を先行研究から観察してきた。本節では、この現象を理論的に説明することを試みる Bjorkman (2010) を概観しながら、その問題点を指摘し、本稿の分析を提示する。

Bjorkman (2010) は、Matushansky (2008) の格付与における  $\phi$  素性の一致に関する理論を go get 構文に援用して、理論的な説明を試みている。

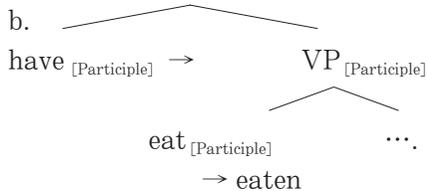
Matushansky (2008) は、形態的な格を具現化する素性は、局所的な主要部—補部の関係を通じて付与され、その主要部は、姉妹要素に主要部の持つ素性を付与し、主要部から素性を付与された姉妹要素はその投射内の全てに、与えられた素性を継承するとする。



(12) では、 $X^0$  がその補部である YP に素性 [F] を付与するとその素性が YP の投射内にある全ての節点に継承されていることがわかる。この格に関する Matushansky の提案を Bjorkman は動詞の屈折変化にも援用できるとする。つまり、主要部となる動詞がある素性を持つとその素性が主要部の姉妹となる投射内の全ての節点に継承

されることで動詞の形態変化を生じさせるとする。例えば、以下の例をみても。

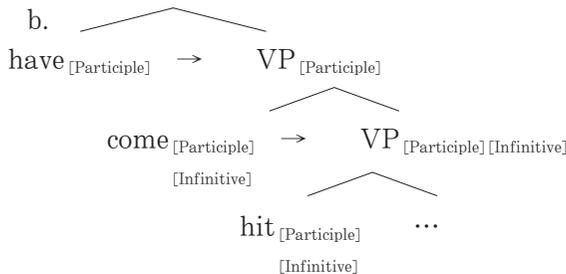
(13) a. Alex will have eaten the cake. (Bjorkman (2010): 20)



Bjorkman は、完了のAspectを示す have は [Participle] の素性を持つと仮定する。この素性が (13b) のように継承され、主動詞である eat にまで継承される。eat は形態的な素性を持たずに統語構造に導入されるため、have から継承された素性である [Participle] を具現化することで過去分詞である eaten として spell out する。これと同様の統語操作を go get 構文に援用することで、この構文に特徴的にみられる bare-stem condition が統語的に説明できるとする。

Bjorkman は、go get 構文のうち、以下のような例外的に完了Aspectに生じる例の生成過程を議論している。

(14) a. Alex will have come hit the piñata. (Bjorkman (2010): 21)



Bjorkman は、go get 構文を形成する動詞は絶対時制動詞 (=tense tantum verbs) であるとして、merge される際に既に [Infinitive] という素性を持っていると仮定する。(14b) では、(13b) と同様に have が持つ [Participle] の素性とその補部の VP 内の全ての節点に継承されている。また、come と hit は [Infinitive] の素性を持って統語構造に導入されると仮定している。そして、これらの動詞は、[Participle] と [Infinitive] の2つの素性を持つことになる。これらの素性が形態的に具現化すると、どちらの素性も同形、つまり、過去分詞として具現化する [Participle] と、原形のままでいることを指定する [Infinitive] が形態的に同じになるために派生が破綻しない。そのため、(14a) が派生するとされる。しかし、(14a) の後項動詞を hit から eat に変えると、2つの素性が形態的に別の形で生じることとなり、派生が破綻する。そのため、Alex will have come eaten the piñata. のような go get 構文は派生されな

いとされる。このように、go get 構文の派生、特に、この構文を構成する2つの動詞は常に原形であるという bare-stem condition は、Matushansky (2008) の格付与の理論を動詞の屈折変化に援用し、また、この構文に導入される動詞が絶対時制動詞であり、統語構造には [Infinitive] の素性を持って導入されるとの仮定から理論的に説明できるとされている。

確かに、Bjorkman (2010) の分析は、(14a) のような事実に対して、素性照合とその形態的な具現化の理論を援用することで、この構文について適切な説明を与えているように見える。しかし、この分析には問題があると思われる。

まず、英語における口語的な表現として例外的に現れるこの構文に対して、特別な素性である [Infinitive] を設定すべきかという点である。このような素性は、動詞が原形で用いられる例、例えば不定詞、使役構文など非定形節に生じる際には、時制や主語との一致がないため、必然性があるかもしれないが、go get 構文に生じる複合動詞は主節に生じることが可能であり、不定詞や使役構文とは出現する統語的環境が異なる。

加えて、Bjorkman の分析が正しいとすると、単体の動詞として go や get が統語構造に導入される際、go get 構文に生じる2つの動詞は異なる素性を持って統語構造に導入されることになるが、この仮定は妥当なのか疑問である。

さらに、Bjorkman は、連結動詞 (serial verbs) を持つ言語やイタリア語のマルサーラ方言などに go get 構文と同様な振る舞いを示すものがあることを指摘して、[Infinitive] 素性の普遍性を主張している。しかし、この素性を普遍的な素性と認めた上で、英語では限定的にしか観察されない go get 構文にもこの素性の普遍性を求めることには問題があると思われる。

go get 構文に理論的な基盤を与える際、考慮すべきことは、英語では本来的には許されない動詞の結合が何らかの語用的背景では許され、特異な形態的特徴がなせ生じるのかについて原理的な説明を与えることが肝要である。

そこで、本稿では go get 構文を形態統語論の立場から以下のように分析を試みる。まず、英語において特殊な状況にしか生じることがない動詞の結合は、さらなる形態素の結合を許さないと仮定する。このような仮定は、Myers (1984) や Pesetsky (1995) などが派生語などで既に議論している形態合成に関わる一般的な特性である。

(15) [<sub>v</sub> [<sub>v</sub> go ] [<sub>v</sub> get ] ] – \*Affix

(15) は、英語では自由形態素である2つの動詞が結合すると、その外側に音形をもつさらなる形態素の合成を許さないことを規定するものである。

この仮定によって、以下の文法的な違いが説明できる。

- (16) a. Every day I go get the paper. (=4a)  
 b. \*Every day my son goes get the paper. (=5a)



の中で説明できる理論の構築が必要であると思われる。

最後に、本稿では別段扱わなかったが、この構文が口語表現として生起することが一般的で、その他では用いられる例がまれであることについて、構文が生起できる語用論的機能をどのように分析に組み入れるのか示すことも必要である。

このように、本稿の分析には解決すべき問題がいくつかあるが、本稿の提案をさらに深化させることで、go get 構文における特異な統語的な特徴を理論的に説明する基盤が与えられると思われる。

(参考文献)

- Bjorkman, M. Bronwyn. (2010) Go get, come see. *University of British Columbia Working Papers in Linguistics* 25. 15-28.
- Carden, Guy and David Pesetsky (1977) Double-Verb constructions, Markedness, and a Fake Co-origination. *CLS* 13, 82-92.
- Matushansky, Ora (2008) A case study of predication. In *Contributions from Formal Description of Slavic Languages*, eds., F. Marusic and R. Zaucer, *Studies in Formal Slavic Linguistics*, 6.5, 213-239. Frankfurt am Main: Peter Lang.
- Myers, Scott. (1984) Zero-derivation and inflection. In *MIT Working Papers in Linguistics: Papers from the January 1984 MIT Workshop in Morphology*, 53-69. Department of Linguistics and Philosophy, MIT, Cambridge, MA.
- Pesetsky, David. (1995) *Zero Syntax: Experiencers and Cascade*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Pullum, K. Geoffrey. (1990) Constraints on intransitive quasi-serial verb constructions in modern colloquial English. *Ohio Working Papers in Linguistics* 39, 218-239.

(コーパス)

Corpus of Contemporary American English